

端午でタンゴ祭り Vol.2

2013年5月5日 東向島「フチ・ローズ」

峰 万里恵 うた
齋藤 徹 コントラバス
高場 将美 ギター

(((I)))

1. スール(南) *Sur*

作詞：オメーロ・マンシ *Homero Manzi*

作曲：アニーバル・トロイロ *Aníbal Troilo*

*ブエノスアイレスの南部、リアチュエーロ川に近い場末の街をうたっています。詩人と作曲家(バンドネオン奏者・楽団リーダー)との緊密な共同作業でつくられました。1948年発表ですが、ここにうたわれた時間・空間がさらに遠いものになうにつれ、後年になるほど共感をまじてきました。今では「南 *Sur*」ということばは ブエノスアイレスの街と タンゴの魂のシンボルのようになっています。

サンフワンとボエード通りの古い街角、そして一面の空。ポンページャ地区——その向こうは洪水を起こす川。思い出の中の若い恋人のあなたの長い髪。そしてあなたの名前が「さようなら」の上に浮かんでいる……

あの鍛冶屋の街角、泥と草原、あなたの家、あなたの歩道、そして掘割。そして雑草とアルファルファのまじった香りが、ふたたび わたしの心を満たす。

サンフワンとボエード通りの古い街角、消えてしまった空。土手に着くと、そこはポンページャ。そこで愛情にふるえていた あなたの20才、あのときわたしが盗んだキスの下で。

過ぎて行ってしまったことどものノスタルジー。人生がいっしょに持って行ってしまった砂。変わってしまった街たちの悪夢。そして死んだ夢のがさ。

スール(南)……土の長い塀、その先は……スール……酒場の明かりひとつ。もうあなたは、昔のように店の窓に寄りかかって あなたを待っている わたしを見ることはないだろう。もうわたしは ポンページャ地区の夜ごと夜ごと、静かに語り合うふたりの歩みを、星たちで照らすことはないだろう。

場末の通りたちと月たち。そしてあなたの窓にいるわたしの愛——すべては死んでしまった、もうわたしにはわかっている……。

2. 花咲くオレンジの木 *Naranjo en flor*

作詞：オメーロ・エスポーシト *Homero Expósito*

作曲：ビルヒーリオ・エスポーシト *Virgilio Expósito*

*作詞を天職とした詩人オメーロと、彼より5才あまり年下の弟——ピアニスト・アレンジャーだったビルヒーリオの兄弟が、とても若いときつくった曲です。1944年発表。この曲の新しさ、独創性は、その後40年あまりたってようやく、広く認められました。

あのひとは、水よりもやわらかかった……やわらかい水よりも……。川よりもみずみずしかった——花ざかりのオレンジの木。

そして その夏の通り、失われた通りに、命のひとかけらを残した。そして、去って行った。

あの人に わたしの手は何をしたのだろうか？ 何をしてしまったというのだろうか？……わたしの胸のなかに、これほどの痛みをのこすほどの……

老いた木立ちの痛み。街角の歌。命のひとかけらとともに……花ざかりのオレンジの木……

最初に 人は悩むことを知らなくてはいけない。それから愛すること、その次に発ってゆくこと、そして最後は 考えもなく歩くこと……

花ざかりのオレンジの薫り、ひとつの愛の むなしい いくつかの約束、それらは風のなかに逃げていった……

その後……「その後」になんの意味がある？……わたしの全人生は「きのう」だ。それが わたしを過去に足止めする。

永遠につづく老いた青春——それがわたしを なにもできない弱い者にしてしまった 光をなくした小鳥のように……

3. ミロンガ・センチメンタル

Milonga sentimental

作詞：オメーロ・マンシ *Homero Manzi*

作曲：セバスティアーン・ピアーナ *Sebastián Piana*

*フォルクローレのギター弾き語りの歌のジャンルとして19世紀末からあった《ミロンガ》を、ブエノスアイレスの街の音楽にしようとしたピアーナ(ピアニスト・音楽教授)の、最初のヒット曲のひとつ。1930年代の初め、歌のためのスタイルでした。その数年後に、《ミロンガ》は、よりテンポが速く、タンゴ・ダンスのリズムの一環となって、今日まで愛好されています。

あなたを思い出すためのミロンガ——センチメンタルなミロンガ。ほかの人たちは泣いて嘆く。わたしは泣かないために うたう。

あなたの愛は とつぜん乾いた。あなたは一度も理由を言わなかった。わたしはこう思ってなぐさめる——あれは女にはつきものの裏切りだった。

ひとつの裏切りの代価を取り立てるために、切りつけるのは たやすいこと。あるいはひとつの情熱の運命を ナイフに賭けることは。

でも 夢中になってしまったことの結び綱は、簡単には切れない。心の杭(くい)にしっかり縛り付けられているときは。

あなたのいないことから生まれたミロンガ。追憶のミロンガ。あなたのバルコニーで、ほかの人はだれも歌わないためのミロンガ。

あなたが夜に帰ってくるように、太陽とともに出て行くように。時にはあなたに「シー」と言うために、あるいは「ノー」とあなたに叫ぶために。

男、あなたをたくさん愛するために。男、あなたに幸せを願うために。男、つらい思いを忘れるため。なぜなら わたしはもうあなたを許したから。

たぶん あなたは決して知ることがないかも。たぶん あなたは信じることができないかも。たぶん あなたは笑わずにはいられなくなるかも——あなたの足元に身を投げ出したわたしを見て！

4. 場末のメロディ *Melodía de arrabal*

作詞：マリオ・バティステラ *Mario Battistella*
作曲：エドゥアルド・ボネッシ *Eduardo Bonessi*
カルロス・ガルデル *Carlos Gardel*

*イタリア音楽の教授だったボネッシが作曲して、歌手ガルデルにプレゼントしました。著作権登録はガルデルの名前ですが、彼はごく小さな直しをただけです(歌いやすくするため)。そのほうが、ずっとすてきになりましたが……。

1932年のガルデル主演映画(パリで撮影)の主題歌になり、作詞者バティステラ(イタリア出身で、アルゼンチンのレビュー界で活動)は、そのときはガルデルの通訳をつとめました。映画撮影のためにパリへ渡ったとき、ガルデルは船室にピアノを持ち込み、毎日ボネッシ先生のレッスンを受けていたそうです。

月に銀を塗られた街——ミロンガ(タンゴのダンス・パーティ)のざわめきがその街の財産のすべて。うすぐらい路地に、バンドネオンがつぶやいている。そのいっぽう 若い娘——花のようにきれい——コケティッシュに待っている、街灯の静かな光の下で。

荒くれ者と歌手たちのゆりかご。けんかと決闘の、わたしの愛のすべてのゆりかご。おまへの壁に わたしはナイフで 好きな人の名前を彫った。——ローサ、あだ名はミロンギータ。マルゴは金髪だった。最初のデートで、場末の娘リタは 彼女

の愛をわたしにくれた。

街……街……おまえには、センチメンタルなスズメの じっとしてられない魂がある。悩み……祈り……やくざな街のすべてが そのまま場末のメロディだ。

古い街……許してください、おまえを思い起こすとき わたしから大きな涙が飛び出したら——それはおまえの石だたみにころがるとき、長くつづくキスとなり、おまえに わたしの心を与える。

5. クリオジータ・サンティアゲーニャ

Criollita santiagueña

作詞：アタウワルパ・ユパンキ *Atahualpa Yupanqui*

作曲：アンドレース・チャサレータ *Andrés Chazarreta*

*タイトルは、サンティアゴ州(アルゼンチン北西部)の土地に生まれ育った娘さんという意味です。作曲者チャサレータは、同州で教育関係の仕事をしながらフォルクローレを採集し、1920年代から民俗芸能団をひきいて、首都ブエノスアイレスでも公演、また数々の録音でフォルクローレの魅力を全国に知らせた 偉大な先駆者です。

この曲は、アルゼンチン全体で愛されていた舞曲《サンバ *zamba*》のリズム・形式です。歌詞はずっと後年になってつけられたもので、作詞者ユパンキは、アルゼンチンのみならずラテンアメリカ最大級のアーティスト(歌手・ギタリスト・作詞作曲家・詩人・作家)です。

サンティアゴの土地娘、きれいな褐色の肌の娘。おまえゆえに、空気はビダリータでいっぱいになる——サンティアゴ娘！

わたしの土地のいなか娘。黒いまつげ。チャニャール林の花、おまえのサンティアゴの朝ごとに。

おまえが水貯め場から 水を運んでくるとき、おまえはおまえの歌声で甘くする、昼寝どきのすべてを——サンティアゴ娘！

サンティアゴの土地娘。編んだ黒髪。おまえゆえに若者たちは歌う、彼らのビダリータを——サンティアゴ娘！

ほかの人たちは誉めそやすだろう、街のしゃれた女性を。でも、野のかわいい女の子、おまえの午後にわたしは上げたい、この おまえの目のように すてきなサンバを——サンティアゴ娘！

6. コントラバス・ソロ (曲目は そのとき決まります)

齋藤 徹

(((II)))

1. タンゴの街 *Barrio de tango*

作詞：オメーロ・マンシ *Homero Manzi*

作曲：アニーバル・トロイロ *Aníbal Troilo*

* 先の『スール(南)』の同じ作者コンビが、1942年に発表しました。ここに歌われている街並みは、詩人マンシが小学校から大学まですごした地区です。ごみ焼却場の跡地が空き地になって大きな池ができ、蛙の声はほんとうにやかましかったらしいです。そのほかの部分も、現実の思い出が美しい詩となって昇華されています。

街のひとつかけら——あちらボンページャ地区のほうで、土手のわきで眠りこんでいる。踏み切りの棒でゆらゆら揺れているランプ、そして 汽車が種まいてゆく「さようなら」の神秘。

月に向かって 犬のほえる声ひとつ。軒先に隠されたあの愛。そして 沼で太鼓を鳴らしている蛙たち。そして 遠くに あのバンドネオンの声。

あちらの あの街角では口笛たちのコーラス。酒場いっぱいのコーディージョ(カード・ゲーム)。もう二度と汽車を見に出てこなかった 近所のあの青白い女性の ひとつの痛み。

こうしてわたしはおまえの夜々を思いおこす——タンゴの街……牛囲い場に入ってくる馬車たち。そして ぬかるみをはねかしている月。そして 遠くに あのバンドネオンの声。

タンゴの街。月と神秘。遠い路たち、どうしていることか！ きょう思い出せもしない古い友人たち、どうなってしまったのか！ どこを歩いているのか！

タンゴの街。あの女はどうなったのか？ フワーナ、わたしがあんなに愛した金髪女。知っているだろうか、わたしが悩んでいることを、彼女を置いてきたあの日から彼女のことを思って！

タンゴの街。月と神秘——思い出の中から、ふたたび わたしにはおまえが見える！

2. あちらのほうのサンバ *Zambita de allá*

作詞作曲：フーリオ・A・ヘレーズ *Julio Argentino Jerez*

* 作者はサンティアゴ州出身。1920年代から、首都ブエノスアイレスで故郷のフォルクローレ(ほとんど自作)を歌って、とても人気がありました。

歌詞に出てくる「ウニャップ」は、雨や気象の変化の前にだけ黄色い花を咲かせる木。気象が変わると花は消える。他のことの予言をすとも……。 「アローハ」は、アルガローボ(マメ科の木)またはトウモロコシの実をつぶし、水と混ぜて発酵させた酒。

サンティアゴ人の歌といえば、それはビダレーラ(抒情的な歌のスタイル)。そしてチャカレーラとサンバ(ともにフォークダンスの形式・リズム)——なんと上手に踊ること！

ボンボ(太鼓)にとびついたら、もう手を離さない。木杵と革を叩いて伴奏する。そのへんで適当に叫び声、ウイハ ハハーイ！

だれかサンティアゴ人が死んだら、だれも彼のことを泣かない。ひとびとは彼にビダレーラをひとつうたう。彼は天国へ行ってしまふ。

ひとびとは鐘を打ち鳴らさない。ウニャップも花を咲かせない。ただ村のボンボだけが 彼を泣いているようだ、トントントンと。

サンバとガト(フォークダンスの形式・リズム)とチャカレーラ、踊るために若い娘たち。アローハ酒の壺がたくさん

——わたしは保証するけれど——決して足りないことはない。

そしてサンティアゴの心がひとつ——わたしは保証するけれど——決して足りないことはない。

3. コントラバス・ソロ (曲目は そのとき決まります)

齋藤 徹

4. ロス・マレアードス(酔いどれたち) *Los mareados*

作詞：エンリーケ・カディーカモ *Enrique Cadícamo*

作曲：フワン・カルロス・コビアーン *Juan Carlos Cobián*

* 1922年に、劇『ロス・ドパードス(麻薬中毒の人たち)』の主題歌として、ピアニストのコビアーンが作曲(歌詞はキャバレーの若いカップルのことを描いていました)。

その20年ほど後に、この曲の歌なしの録音を偶然耳にして魅了された アニーバル・トロイロが、ぜひ自分の楽団でも演奏したくなって、詩人カディーカモに新しい歌詞をつけてもらいました。

妖しく、燃えているような あなたを見つけた。あなたは飲んでいて、美しく、死の影を宿して……飲んでいて。そしてシャンパンの爆発する音のなかで、狂おしく笑っていた、泣かないために。

あなたを見出したわたしは あわれみを感じた。わたしの目に入った、あなたの両目が輝くのが、電気の熱をもって……あなたの美しい両目。わたしがあれほど愛したものの……

今夜——わたしの女友だち——アルコールがわたしたちを酔わせた。かまうものか、人々があざ笑っても、わたしたちを酔いどれたちと呼んでも……

人それぞれに その悩みがある。わたしたちも悩みをもっている。今夜わたしたちは飲むことにしよう。なぜならもうわたしたちは ふたたび会うことはないのだから。

きょうあなたはわたしの過去に入っていく、わたしの人生の過去に…… 3つのものを わたしの傷ついた魂はもっている——愛……くしみ……痛み……。

きょうあなたは過去に入っていく。そしてきょう わたしたちは新しい道をとろう。わたしたちの愛は どんなに大きかったことだろう——それなのに……ああ、見てごらん、残ったものを……。

5. ボルベール(帰還) *Volver*

作詞：アルフレード・レペーラ *Alfredo Le Pera*

作曲：カルロス・ガルデル *Carlos Gardel*

*ガルデルの主演映画(1934年)の挿入歌です。このような曲は、まず彼がシチュエーションにふさわしいメロディをつくり(それを音楽家が楽譜に書き)、そこにレペーラ(映画の脚本家でもある)が作詞しました。

わたしの目には見える気がする、遠くでわたしの帰り道に 印をつけている光のまたたきが。その同じ光が かつては その青白い反映で、痛みの深い時間を照らしていたのだ。

わたしは帰るのをのぞまなかったのに、いつも人は最初の愛に帰ってゆく。古い街の通り、そこでは こだまが言った「あのひとの命はあなたのもの、あの人の愛はあなたのもの」 星たちのあざけるようなまなざしの下で——その星たちが きょう 冷たくわたしの帰るのを見ている。

わたしはこわい、思い出が過去といっしょに わたしの人生に対決しようと帰ってくるのが。わたしは出会いがこわい。それは思い出でいっぱい、わたしの夢を鎖でしばりつける。

でも 逃げてゆく旅人は、遅かれ早かれ、その歩みを止める。そして すべてを破壊する忘却が たとえわたしの古い夢を殺してしまったとしても、わたしはささやかな希望を隠し持っている——それがわたしの ころの 財産のすべて。

帰ってゆく……ひたいは枯れ、時の雪が わたしのこめかみを銀色に染めた。

感じる……人生は風のひと吹きだと、20年は「無」にすぎないと。熱に浮かされたまなざしが、影の中をさまよいながら、あなたを探し あなたの名を呼んでいると。

生きてゆく……魂は甘い思い出にしがみついたまま——その思い出に ふたたび わたしは泣く。